

いま私の『房』にある土器は10点程。縄文の深鉢、弥生・古墳の壺、割れて接合したものもある。と言っても、すべて私の作ったものだ。この点を強調しておかないと、

「あいつは考古学をやっとるから発掘現場から……」

なんて言われかねない。ともあれ、粘土紐を輪積みして出来上がったばかりの土器の形は、変形した土管か植木鉢のようなもので何ら味気がない。これに縄文、細い粘土紐、沈線、刻み目、突起などを取り付けていくと、表面が綺麗な文様で飾られ、躍動する生命力が俄然湧き上がってくるから不思議なものだ。丁度、影絵が鮮やかな着物を着た立体的な人形に変身するのと同じだ。このとき使うのが竹篋、竹串、あさりの殻、多種のより糸（縄文の施文具）、箸、櫛、半裁竹管、叩き板などだ。つまり私の『文具』なのだ。

「そんなもの文具じゃないわい」

なんておっしゃったら大間違い。まあ、ちょっと耳を傾けてくださいますかな。

そもそも『文』とは、綺麗な模様・飾るの意味で、縄文の模様の一コマから描かれた象形文字なのである。天空を飾る星や月の模様から「天文」という言葉も創られている。そして、『具』とは、備える・備わるの意味を持ち、仕事のために揃えておく用具のことなのである。つまり「文具」とは、「綺麗な模様で飾るために揃えておく用具」というのが原義となる。ならば、土器の表面を装飾するために私が使う様々なものは、間違いなく私の「文具」ではないか。”ウ～ン、なるほど”と思われた方は、文具の有り難さを知る立派な人だ。

ついでに、『房』とは、本来、母屋の両側に張り出した小部屋とか、全体の中が小さい部分に分かれたもの（例えば蜂房・蓮房など）を言ったらしいが、今は広い意味で部屋のことを指している。『文』と『房』と『具』、『文房具』。

さて、土器製作用の文具を作るための文具を文房具屋さんに行こう。